



TITLE:

<批評・紹介> 兼常清佐著 「音楽」

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

---

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介> 兼常清佐著 「音楽」. 東洋史研究 1937, 2(3): 272-273

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138729>

RIGHT:

## 音 樂

兼 常 清 佐 著

支那の音楽に關する支那人の著書は「律呂正義」や「律呂新書」等の古いものはさて置き、近頃のものだけでも王光祈の「中國音樂史」を始めとして十指に餘る數に上つて居る。我國でも田邊尚雄氏の「東洋音樂史」の他二三を數へる事が出来る。けれども此等の書物は全て支

那の音楽に關して多少共知り得る事を書き綴つたに過ぎないものであつて、それ等の智識が今日吾々が一般に音楽に對して持ち得る最も完全な音樂史の智識と比較してどの程度のものであるかといふ様なことには殆んど言ひ及んで居ない。兼常氏のこの小冊子に於ける意圖は主としてこの點に存する様に思はれる。それは支那音樂史の序論ともいふべきものである。支那の音樂史の如くその残つてゐる資料が極く貧弱な場合にはかゝる前提は確に必要である。又氏の如く音樂そのものを眼目としてものを言ふならば現存の資料は音樂史に對して殆んど價値が無いといふのも至極尤もな事である。併し乍ら東洋思潮と銘打つ岩波講座の中の音樂といふ一項目の中では吾人はもう少し他のものをも期待していいのではなからうか。例へば音樂がその様に禮と結びつけられたり政治と結びつけられたりすることの意味は何であるか、昔の支那人が一般に「樂」と稱する概念が今日の純粹な「音樂」といふ概念と如何に異つて居るか、音樂は支那の文化史に如何なる地位を占めたか等の問題などが今少し深い關心を以て取り上げられていいのではなからうか。

且又假に兼常氏の如く音樂の實際に關心を限つたとし

でも、もう少し問題は残つて居る様に思ふ。文獻の上だけでも今少し詳しく言へることがある様に思ふ。例へば漢以後では雅樂（宮廷音樂）は、三代の音樂が多く失はれた結果鄭聲の如き俗樂や軍樂をも取り入れたこと、その後も世が亂れる毎に雅樂が失はれて古い俗樂が雅樂に取り入れられたこと、隋唐の時代には西域その他の外國の音樂が支那に特に盛に行はれたこと、宋元時代には音樂が民衆に普及し、且戯曲の如き西洋の歌劇に似た新しい形式が生れたこと、明代に於てはこの復古思想と共に再び三代の音樂の復興が唱へられたこと等私の貧弱な智識の範圍内でも問題は少くない。更に全然兼常氏の立場に立つて言ふとしても、今日實際に知り得る支那の音樂は如何なるものであり、又その智識は何の時代迄溯り得るかといふ限界の問題に就て氏はもつと親切であるべきではなからうか。

併し乍らこの小冊子より得る吾々の利益も決して少ない。支那の音樂に關する智識の眞の意味に於けるアウトラインを正確に知り得ることはいふまでもないが、特に私の注意を惹いたのは氏の詩經に對する態度である。詩經に關する研究法でグラネ氏の民俗學的研究の如きは

今日異色あるものとされてゐるが、兼常氏の如く民謡一般に關する基礎的な智識を以て詩經に臨む事も一つの面白い方法であると思ふ。詩經の中にはかゝる觀點からしてある程度の解決の暗示を得られる様な詩篇が相當あるかも知れない。之は私の氣付いた一例に過ぎないが人によつては又別の暗示をこの著から受けることがあるであらう。そしてかゝる事は結局氏の音樂に對する態度の徹底の仕方に起因してゐるのだと私は考へて居る。

（内 藤 戊 申）